

草筆木筆で描く不思議のらんたち

草画帖

70



紫陽花号



紫陽花号です。

雨号でもあります。

別名…四葩、七変化、八仙花。

表紙画・題字共に紫陽花筆。

左は山紫陽花です。

あぢさゐのましろ彼方に星の球

隠栖もやや二十年額の花

七変人



紫陽花筆。紫陽花やいづれの色を花盛 蘆風



紫陽花筆。旅のこころは紫陽花の甘酸辛苦の七色に。



額の花筆。しとしともの思ふころ。



雨
に
静
し
〜



額の花筆。青空を恋うて青く憂う。太陽を乞うて赤く愁う。

*あじさい日詩 十

雨不足で

争いの絶えない村から

弁当忘れても

傘を忘れない町にやってきた

なにかあっても

不思議と晴れる

生地 of 呪力というのも凄いものだ

晴男

それが生涯唯一の勲章だったね

*あじさい日詩 十一

もつとも

なにか無いときは

いつでも雨が降った

水気のない

旱のような

わけのわからない雨まで

たくさん降った

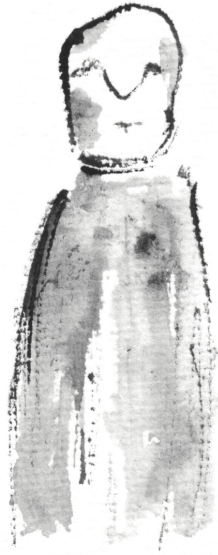
生涯雨男だったような気もするね



雨人



額の花筆。うすものの雨に破れやすき旅。



額の花筆。雨を悦ぶ草木。六月の雨心定まる。



雨
花



額の花筆。雨また奇也、雨羅の果ての虹の妙。



紫陽花筆。思ふ事紫陽花の花にうつろひぬ 内藤鳴雪

あじさの
球の甲の
にせの花
球の甲の
にせの花
にせの花



こころをばなににたとへん／こころはあぢさゐの花 萩原朔太郎

草話

紫陽花は七変化とか八仙花とか称されて、その花色の多様を愛でられる。語源とされる古代の集真藍（あづさあい）という言葉にも藍という色が含まれ、白楽天が命名した紫陽花という名にも紫がある。但し、これは当時外来種だったライラックのことであるという。

紫陽花や七度めは茶色なり 五明

紫陽花の七色八色はどんなものか。薄緑、白、青、紫、薄桃、赤……その果ての枯色までを江戸の俳人は慈しんだか。実際枯れ残った玉も美しい。

*

紫陽花の咲き始めた頃、庭に望遠鏡を出して、翌年の春には大彗星になるというヘルボップ彗星を探したことがある。ようやく見つけた白くぼやけた光芒は遥か彼方の紫陽花のようにも見えた。わし座で七等だった。

数十万個の星が集まった球状星団、その星の粒々が確かめられるものなどは、もつとこの花に似ていたりする。

*

紫陽花は水を欲しがり、雨を喜ぶ植物。

雨二日あぢさゐ 軽き躁に入る

ふうら（風羅）もこの季節、雨羅に変じることがある。まして、筆が紫陽花ならば。

かくて雨羅坊が何人か登場して、半ば雨号となった。しかるに編集完了の日に、観測以来初めてという六月の梅雨明けが発表された。



アジサイ冬芽

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第70号 2025年6月29日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008